

部屋のみる夢 ボナールからティルマンス、現代の作家まで

ポーラ美術館(箱根・仙石原) 23.01.28~07.02



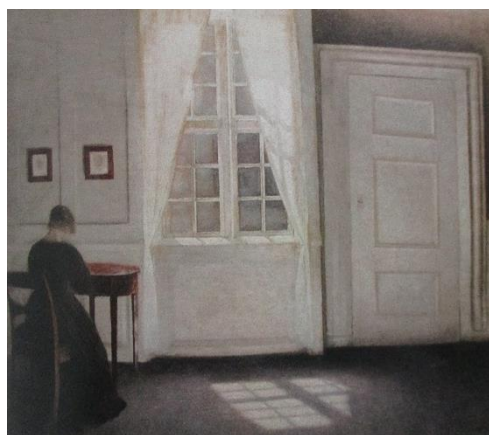
感染症が制御不能な形で世界的に流行している状態の「パンデミック」以降、我々の生活様式は大きく変化をしてきた。移動が制限された状況で誰もが多くの時間を過ごしたのが「部屋」という空間である。安心をもたらす室内での生活は、外の世界からの隔絶されている

ため閉塞感と隣合わせのものであった。他方、閉じられた空間で紡がれた親しい人たちやかけがえのないものとの関係は、日常生活を抜くためだけではなく、変化の乏しい生活に彩を添えるのに、欠かせないものであったためと言える。

本展は、19世紀から現代に至るまでの“部屋にまつわる表現に特徴のある作家”を取り上げ、この小さな世界の中で織りなされる親密な記憶や夢のありようを、あらためて見つめ直すものである。個性に溢れた作家たちによる多彩な室内の表現は、ステイホームの経験を通じて静かに変容した我々の心の中で、新たな像を結び始めるだろう。

ヴォルフガング・ティルマンス 《静物、ポーンエステート》 2002年 左上
草間彌生 《ベッド、水玉脅迫》 2002年 右上
ピエール・ボナール 《静物、開いた窓、トルヴィル》 1934年頃 下図

ヴィルヘルム・ハマスホイ 《陽光の中で読書をする女性》 1899年
《ストランゲーゼ 30番地》 油彩/カンヴァス



デンマーク出身の画伯は、有名な作品の複写写真をコレクションしていて、本作のモデルは、画伯の母親が白い頭巾を被って本を読む様子である。窓の構造、室内に射す光、窓の横に架けられた絵までもが、17世紀オランダの「ピーテル・ヤンセンス・エリンガ」の作品と一致するようである。この要素を削ぎ落した静けさに満ちた独自の室内画はその静謐さに心奪われる作品である。